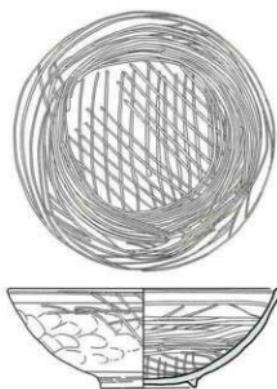


藤井寺市発掘調査概報 第3号

北岡遺跡 (KT2009-8区)



2010年3月

藤井寺市教育委員会

北岡遺跡 (KT2009-8区)

位置と環境

調査区は、羽曳野丘陵の北につらなる中位段丘上に位置し、地形は南方向に下降している。北岡遺跡の南西隅にあたり、南に開析谷が存在する。

東に接するKT92-5区の調査では、8世紀初頭を築造時期の上限とする掘立柱建物が2棟見付かった。これらは、面積が約52.1m²、約43.1m²といずれも大型であり、特殊な機能を持った建物の可能性がある。また、同調査では、大小2個の五鉛杵が見付かった。大きいほうは、13世紀後半から14世紀初頭、小さいほうは14世紀半ばを上限とする時期のものである。これらは15世紀代の溝の中に立てたような状態で出土しており、溝が土で埋まつた後に穴を掘って埋めたのではなく、まだ完全に溝が埋まっていない段階で突き刺すよう立てたと想定される。このことから、この溝は、五鉛杵を立てて用いるような祭祀行為を行う特殊な性格を持った場所であるとも考えられる。

東へ約85mのKT92-1区の調査では、貯水施設と考えられる掘り込みを確認し、埋土から15世紀前半を中心とした土器類が出土した。この掘り込みの埋没の上限も同時期に求められる。同調査区では中世段階の掘立柱建物も検出している。

北東へ約60mのKT93-9区の調査では、中世段階の井戸13基と区画のためと考えられる溝を検出した。そして、多数の中世の土器類が出土している。

以上のように、これまでの周辺の調査では、古代及び中世段階の遺構・遺物が確認されている。

調査の経過

建物建設に伴う文化財保護法第93条第1項の届出が提出されたため、協議を行い、申請者の依頼を受けて、建物建設部分及び防火水槽設置部分にトレンチを設定して調査を実施した。調査面積は約826m²である。

調査区は、もとは農地として使用されていた。南方向に下降する地形を反映して、敷地内は北端から三分の一ほどのところで段をなしてそれより南側が0.5mほど低くなっている。現状のレベルは、北端でT.P.24.7m、南端でT.P.24.2m程度である。

トレンチ北側の標高の高い部分は、旧耕土(第1層)の下に、茶灰色細砂が少量混じる暗灰色細砂(第30層)、明黄灰色細砂と暗灰褐色細砂が混じる層(第31層)、明黄灰色細砂(第32層)、黄灰色細砂が少量混じる暗灰色細砂(第33層)のいずれかが薄く堆積することを基本とし、その下に地山である黄灰色粘質土があらわれる。

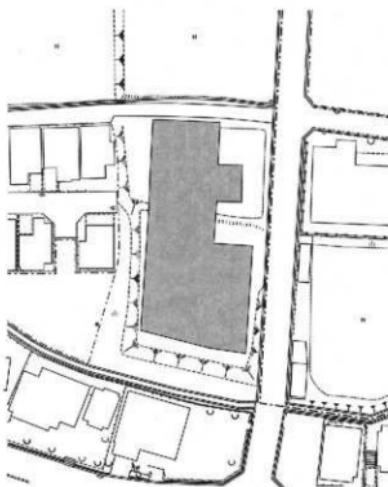


図1 トレンチ位置図 (S=1:1,000)

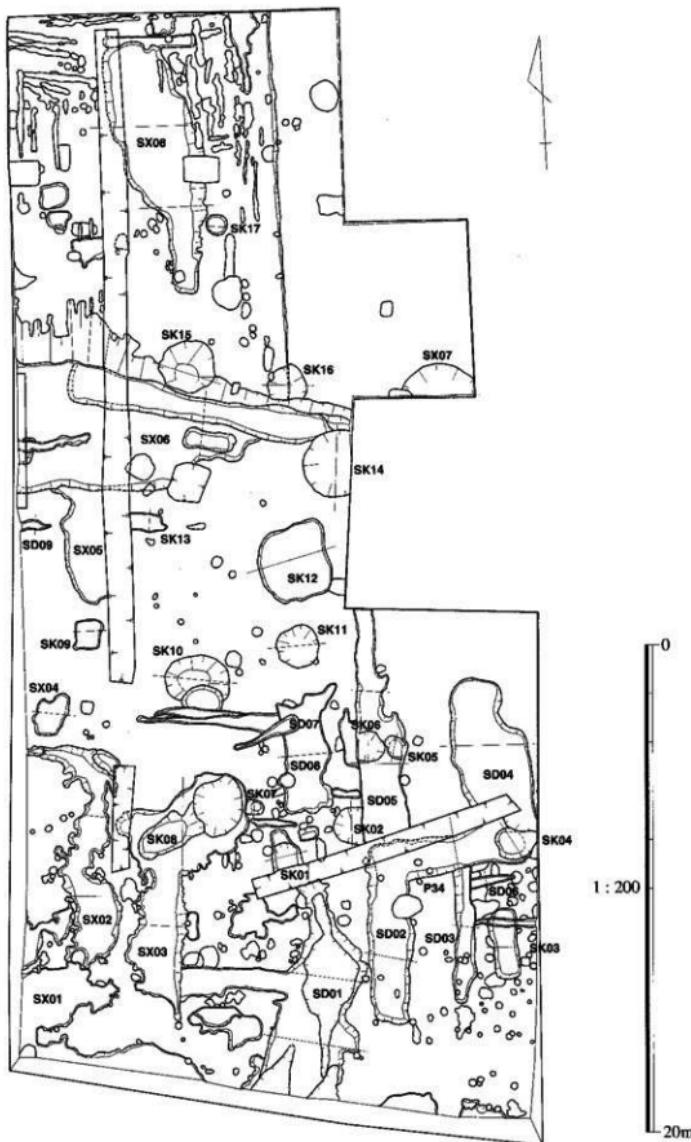


図2 造構平面図

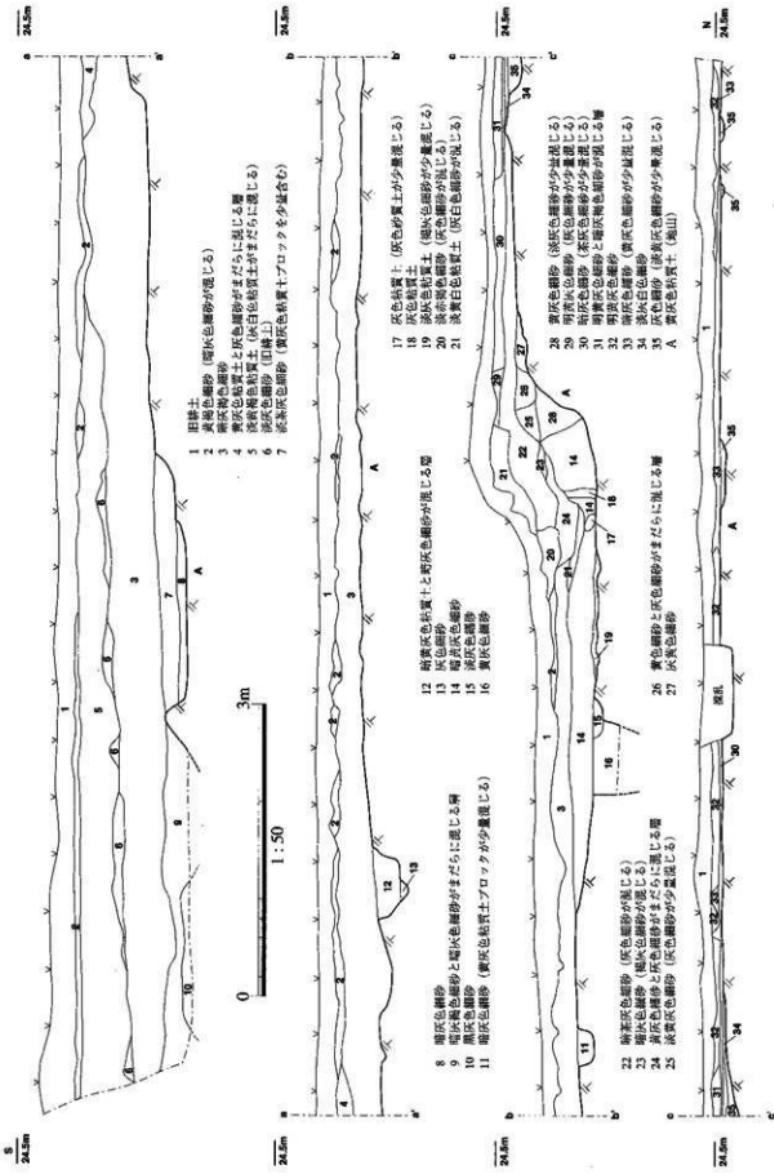


図3 テレンチ断面図

これに対して、トレンチ南側の一段下がった標高の低い部分は、旧耕土（第1層）の下、部分的に暗灰色細砂が混じる黄褐色細砂（第2層）が認められる。第2層は床土である。そして、その下に暗灰褐色細砂（第3層）が堆積しており、同層を除去すると地山である黄灰色粘質土があらわれる。なお、南端では第1層・第2層と第3層との間に灰白色粘質土がまだらに混じる淡黄褐色粘質土（第5層）が堆積している。また、一部に淡灰色細砂（第6層）が認められる。第6層は現代の旧耕土で、第5層は現状の農地を造成する際の整地土である。

地山レベルは、トレンチ北端でT.P.24.4m、中ほどの段の部分の標高の高い部分でT.P.24.3m、低い部分でT.P.23.7m、トレンチ南端でT.P.23.0m程度である。地山の最も標高の高い部分と低い部分の比高は、1.4mを測る。特に中ほどの段より南側は、地山レベルは南に行くにしたがって下降し、南方向への緩やかな斜面になっていることが分かる。

排水置き場を確保するため、調査は北側半分と南側半分の2回に分けて、反転して行った。

調査の成果

遺構

遺構の検出は、すべて地山上面で行った。溝、土壌、掘り込み、ピット等がある。主な遺構について報告を行う。

SD01 トレンチ南側で検出した。南北方向の部分に、西側に東西方向の部分が取り付く。

南北方向の部分はトレンチ南端から北へ8.5mのところで収束する。上端の平面形態は不定形で、最大幅は3.4m程度を測る。断面形態は、北アゼ部分では側面は緩やかに落ち込む。そして検出面から約0.8mの深さから、西寄りの部分のみがさらに落ち込む。また、南アゼ部分では底面に凹凸のある浅い皿状を呈し、中央よりも東寄りでさらにやや急に落ち込む部分がある。この部分での検出面からの深さは0.44mを測る。このことから、この遺構は、確認された範囲内では北のほうが深く、南のほうは浅くなっていることが分かる。また、下のほうに粘質土系の埋土の堆積が認められることから、一定期間漏水の状態にあったことが想定される。

東西方向の部分は、上端の平面形態は不定形な部分もあるが直線的である。最大幅1.3m、深さ0.1m程度を測る。南北方向の部分に流れ込むための溝であると考えられる。

遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器、青磁、瓦が出土した。14世紀前半を主とする所産と考えられる。この遺構の埋没の上限も同時期に求められる。

なお、南北方向の部分の南端から、盾形埴輪の円筒部分の一部が出土した。流水のための管として再利用したものとも考えられる。

SD02 トレンチ南側で検出した。上幅の平面形態は直線的で、トレンチ東壁から西方向へ約6.5mのところで直角に近い角度で南方向に屈曲する。そして、そこから約7m南にいったところで収束する。上端の最大幅は約1.8mを測る。断面形態は、北アゼ部分では浅い椀状を呈し、検出面からの深さは約0.35mを測る。南アゼ部分ではそれよりも浅くなってしまっており、検出面からの深さは約0.1mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器、白磁が出土した。溝という遺構の性格上、やや時期的に幅があるが13世紀中頃を主とする所産と考えられる。この溝の埋没の上限も同時に求められる。

SD03 トレンチ南東部で検出した。南北方向で、南端はトレンチ内で収束する。上端の最大幅は約0.9mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.3mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土

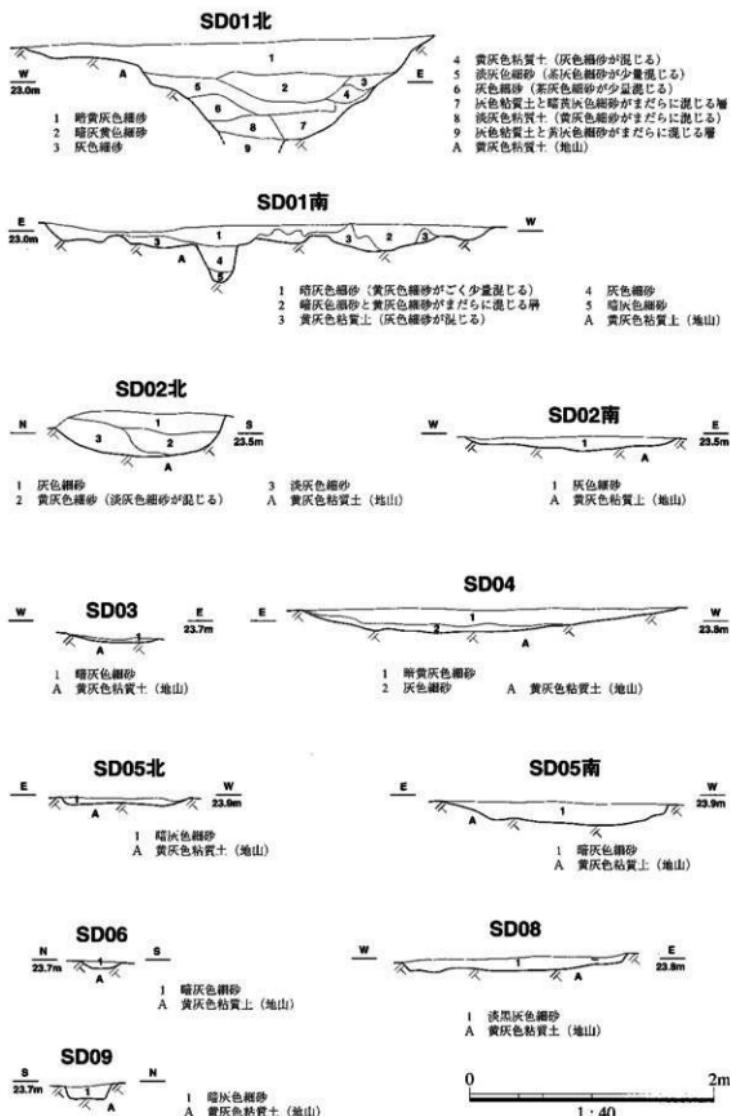


図4 SD01 ~ 06・08・09 断面図

器、土師器、須恵器、瓦が出土した。

SD04 トレンチ東側で検出した。南北方向で、北端はトレンチ内で収束する。上端の最大幅は約3.2mを測る。断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.2mを測る。瓦器、瓦質土器羽釜、瓦が出土した。

SD05 トレンチ東側で検出した南北方向の溝。上端の最大幅は約2mを測るが、北側は幅がせばまる。断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは、北アゼ部分では0.06m、南アゼ部分では0.12mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器が出土した。

SD06 トレンチ南東部で検出した東西方向の溝。東端はトレンチ内で収束する。上端の最大幅は約0.4mを測る。断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.06mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器が出土した。

SD07 トレンチ南側中央寄りで検出した。東西方向で、両端はトレンチ内で収束する。上端の長さ2.8m、最大幅0.7m、検出面からの深さは0.1m程度である。遺物は、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器が出土した。

SD08 トレンチ南側中央寄りで検出した。南北方向で、両端はトレンチ内で収束する。上端の最大幅は約1.8mを測る。断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器が出土した。

SD09 トレンチ中央部西端で検出した。東西方向で、東端はトレンチ内で収束する。上端の最大幅は約0.4mを測る。断面形態は、両方の側面がやや急に落ち込み、底面は平坦である。検出面からの深さは約0.1mを測る。

SK01 トレンチ南側で検出した。南側を搅乱に切られるため、全形は不明である。断面形態は、両方の側面が急に落ち込む。検出面から約0.6mまで掘削した。完掘はしていないが、井戸である可能性も考えられる。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器が出土した。

SK02 トレンチ南側で検出した。上端の平面形態はいびつな円形を呈すると思われる。直径約1.5mを測る。断面形態は、南側の側面はやや急に落ち込むのに対し、北側の側面の落ち込みは緩やかである。検出面から約0.6mまで掘削した。完掘はしていないが、井戸である可能性も考えられる。遺物は、瓦器、土師器が出土した。

SK03 トレンチ南東部で検出した。上端の平面形態は南北に細長い隅丸長方形を呈し、最大幅は東西約1.1m、南北約2.7mを測る。断面形態は、両方の側面がやや急に落ち込み、底面は平坦である。検出面からの深さは約0.51mを測る。埋土は3層からなっており、特に最下層の暗灰色細砂が少量混じる淡黄褐色粘質土は地山と同質の土であると思われる。このことから、この土壤を埋め戻す際に、周辺で掘削した際に排出された土を使用した可能性も考えられる。遺物は、瓦器、土師器が出土した。

SK04 SD02の底面で検出した。上端の平面形態はいびつな円形を呈し、直径は確認できるところで1.5m程度である。断面形態は楕状を呈し、検出面からの深さは約0.3mを測る。遺物は、瓦器、土師器、須恵器が出土した。13世紀初頭の所産である。この土壤の埋没の上限も同時期に求められる。

SK05 トレンチ東側、SD05の底面で検出した。上端の平面形態はややいびつな円形を呈し、直径約0.9mを測る。断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.14mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、瓦が出土した。

SK06 トレンチ東側、SD05の底面で検出した。上端の平面形態は円形を呈し、直径約1.2mを測る。

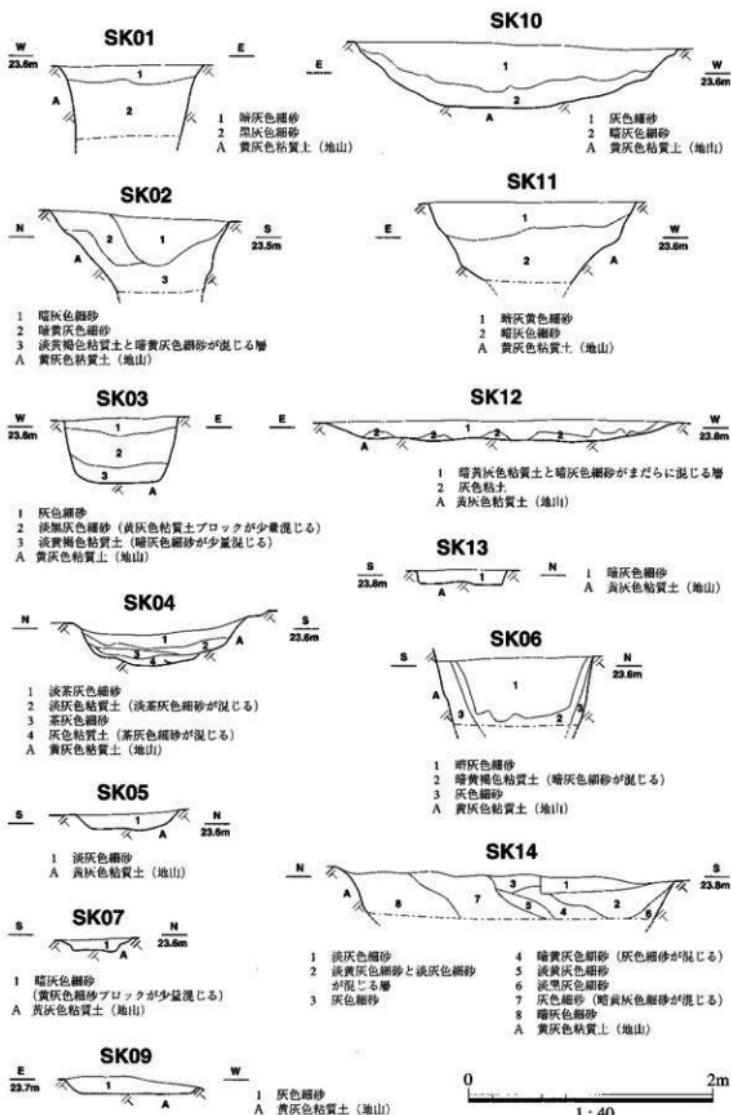


図5 SK01 ~ 07・09 ~ 14 断面図

断面形態は、両方の側面が急に落ち込む。検出面から約0.54mまで掘削した。完掘はしていないが、井戸である可能性も考えられる。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器が出土した。

SK07 トレンチ南側で検出した。上端の平面形態はいびつな円形を呈すると思われる。直径約0.6mを測る。断面形態は、両方の側面が段をなして落ち込み、底面は平坦である。検出面からの深さは約0.11mを測る。

SK08 SX03の底面で検出した。上端の平面形態は東西に細長いいびつな楕円形を呈し、短径約1.4mを測る。断面形態は浅い楕状を呈すると思われる。廃棄されたような状態でこぶし大の石がまとまった状態で出土した。それらの石に混じって遺物も出土している。瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器、備前焼、瓦があり、15世紀前半を主とする所産と考えられる。この土壌の埋没の上限も同時期に求められる。

SK09 トレンチ中央部で検出した。上端の平面形態はややいびつな隅丸方形を呈し、一辺約1.2mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.14mを測る。遺物は、瓦器、土師器が出土した。

SK10 トレンチ中央部で検出した。上端の平面形態は楕円形を呈し、長径約2.5mを測る。断面形態は浅い楕状を呈し、検出面からの深さは約0.5mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器、白磁、瓦が出土した。14世紀前半の所産である。この土壌の埋没の上限も同時期に求められる。

SK11 トレンチ中央部で検出した。上端の平面形態はややいびつな円形を呈し、直径約1.7mを測る。断面形態は、両方の側面が緩やかに落ち込む。検出面から約0.63mまで掘削した。遺物は、瓦器、土師器が出土した。

SK12 トレンチ中央部で検出した。上端の平面形態はいびつな円形を呈し、直径は最大で約3.5mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.18mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、瓦が出土した。13世紀末から14世紀初頭の所産である。この土壌の埋没の上限も同時期に求められる。なお、底面上に灰色粘土が部分的に堆積していることから、この土壌は、一定期間、水が浸んだ状態であったと考えられる。

SK13 トレンチ中央部で検出した。西側を搅乱に切られるため、全形は不明である。断面形態は、両方の側面が急に落ち込み、底面は平坦であるがやや凹凸が認められる。検出面からの深さは約0.12mを測る。遺物は、土師器が出土した。

SK14 トレンチ北側で検出した。上端の東部分がトレンチ外に出るために全形は不明であるが、ほぼ円形を呈すると思われる。上端の直径は約2.6mを測る。断面形態は、両方の側面がやや緩やかに落ち込む。検出面から約0.35mまで掘削した。完掘はしていないが、井戸である可能性も考えられる。遺物は、瓦器、瓦が出土した。

SK15 トレンチ北側で検出した。平面形態は、ややいびつな円形を呈し、直径約2.2mを測る。断面形態は、いびつな楕状を呈し、検出面からの深さは約1.1mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器、瓦が出土した。14世紀前半を主とする所産と考えられる。この土壌の埋没の上限も同時期に求められる。

SK16 トレンチ北側で検出した。敷地内の南側が一段下がる地形のために上端の一部が切られているが、平面形態はいびつな円形を呈すると思われる。直径は確認できたところで約1.6mを測る。断面形態は、両方の側面が急に落ち込む。検出面から約0.45mまで掘削した。完掘はしていないが、井戸で

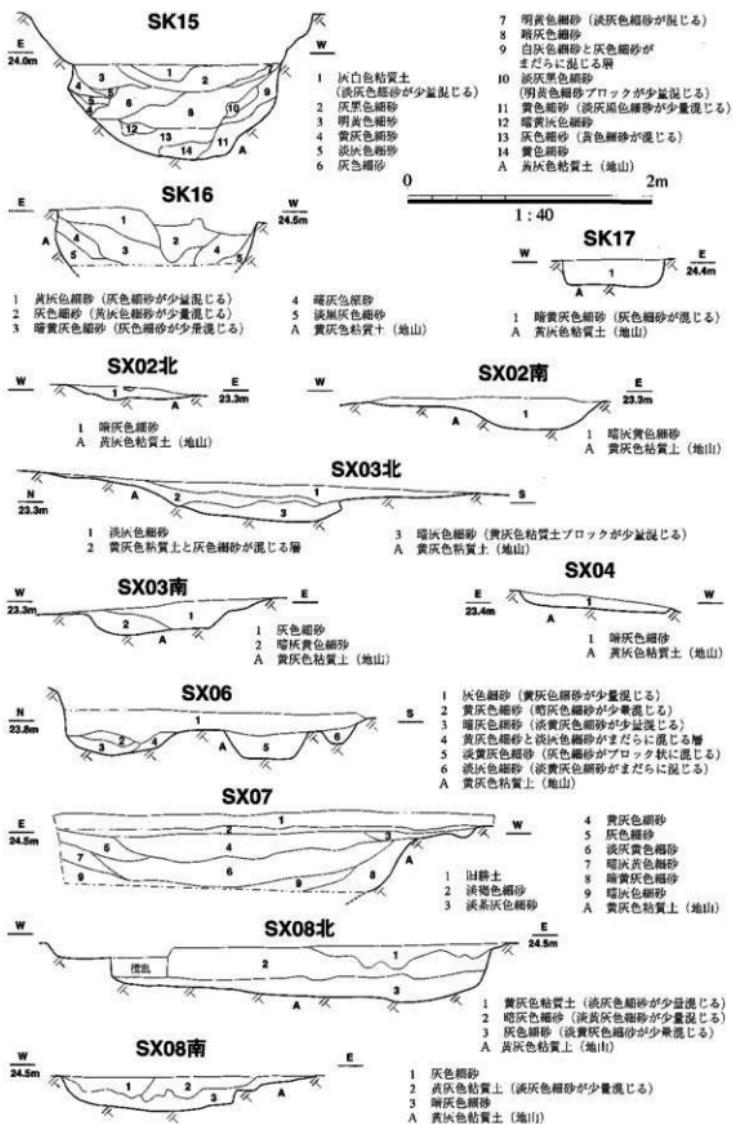


図 6 SK15 ~ 17、SX02 ~ 04・06 ~ 08 断面図

ある可能性も考えられる。遺物は、瓦器、土師器、須恵器が出土した。14世紀末から15世紀初頭の所産である。この遺構の埋没の上限も同時期に求められる。

SX17 トレンチ北側で検出した。上端の平面形態は円形を呈し、直径約0.9mを測る。断面形態は、両方の側面が急に落ち込み、底面は平坦である。検出面からの深さは約0.21mを測る。遺物は、瓦器、土師器が出土した。

SX01 トレンチ南西隅で検出した。平面形態は不定形である。埋土は、暗灰褐色細砂と暗灰色細砂がまだらに混じる層と、黒灰色細砂とが認められる。遺物は、土師器が出土した。これは、調査区の南側に存在する開析谷に向けての自然の落ち込みである可能性が考えられる。

SX02 トレンチ南側、SX09の西隣で検出した。上端の平面形態は不定形であるが、南北方向に細長い。断面形態は、北アゼ部分では浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。南アゼ部分では西側の側面が緩やかに落ち込むのに対し東側の側面はやや急に落ち込む。この部分での検出面からの深さは約0.24mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器、青磁、瓦が出土した。14世紀後半の所産である。この掘り込みの埋没の上限も同時期に求められる。

SX03 トレンチ南側で検出した。上端の平面形態は不定形であるが、南北に細長く、北部分は東に屈曲して収束する。南アゼ部分での断面形態は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.22mを測る。一方、北アゼ部分では側面は緩やかに落ち込む。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、備前焼、青磁、瓦が出土した。14世紀末から15世紀初頭を主とする所産と考えられる。この掘り込みの埋没の上限も同時期に求められる。

SX04 トレンチ南側中央寄りで検出した。上端の平面形態は不定形で、幅は最大で約1.9mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.1mを測る。

SX05 トレンチ中央部で検出した。東側を擾乱に切られるため、全形は不明である。遺物は、瓦質土器、土師器が出土した。14世紀末から15世紀初頭の所産である。この掘り込みの埋没の上限も同時期に求められる。

SX06 トレンチ北側で検出した。平面形態は不定形である。断面形態は緩やかに落ち込み、検出面からの深さは0.24m程度で、底部で東西方向の溝状遺構を2条検出した。遺物は、瓦器、瓦質土器、土師器、東播系須恵器、備前焼、瓦が出土した。瓦には、軒平瓦、軒丸瓦の破片がある。遺構の性格上、やや時期的な幅が認められるが、14世紀末から15世紀初頭を主とする所産と考えられる。この遺構の埋没の上限も同時期に求められる。なお、この遺構は、敷地内の地形が一段下がった部分に接しており、段に接して低い部分に自然にできた落ち込みである可能性が考えられる。そうだとすると、現地形にも認められる段の形成時期の上限も14世紀末から15世紀初頭に求められることになる。

SX07 トレンチ北側東寄りで検出した。上端の南部分がトレンチ外に出るために全形は不明であるが、ほぼ円形を呈すると思われる。断面形態は、側面がやや緩やかに落ち込む。検出面から約0.64mまで掘削した。完掘はしていないが、井戸である可能性も考えられる。遺物は、瓦器、瓦が出土した。遺物は、瓦器、土師器、東播系須恵器、白磁が出土した。

SX08 トレンチ北側で検出した。平面形態は不定形であるが、南北に細長い。幅は北側で最大3.2m程度であるが、南側は1.2m程度と細くなっている。断面形態は、北アゼ部分では皿状を呈し、検出面からの深さは約0.45mを測る。南アゼ部分では、東側の側面が緩やかに落ち込んだ後、段をなして急に落ち込み、底面に至る。この部分での検出面からの深さは約0.27mを測る。遺物は、瓦器、瓦質土器、

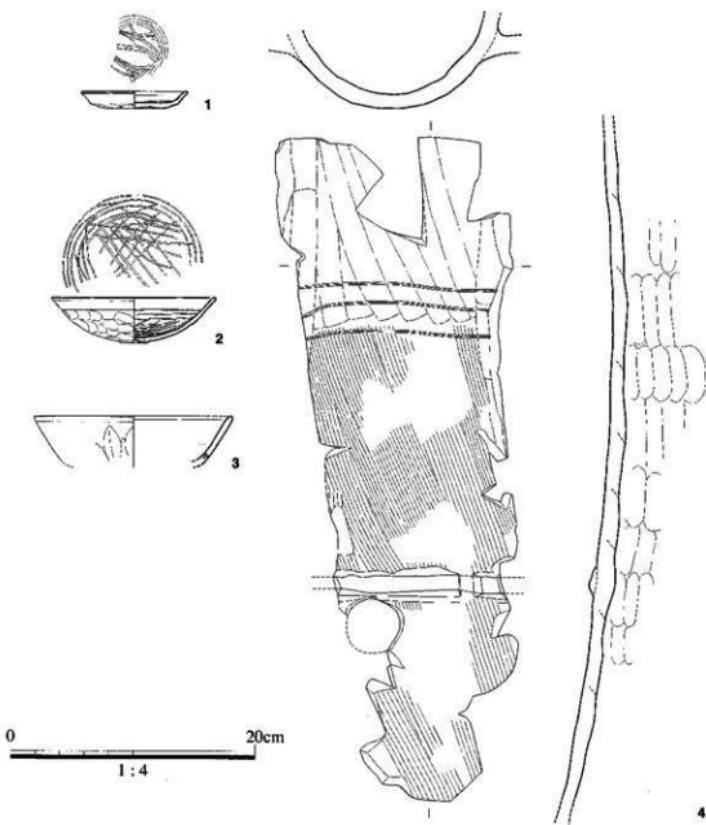


図7 SD01 出土遺物実測図

土師器、須恵器が出土した。

なお、これらの他に多数のビットを検出した。これらの大半は中世後階のものであると考えられる。現時点では掘立柱建物等に復元できていないが、今後検討する必要がある。

遺物

遺物は、整理用コンテナで14箱分出土した。各遺構から出土した主なものについて報告を行う。

SD01 (1~4) 4点を図化した。1は瓦器皿である。口径8.2cm、器高1.4cmで、内面に暗文を施す。2は瓦器椀である。口径12.7cm、器高3.6cmで、内面に暗文を施す。3は青磁碗である。口径15.3cmを測る。なお、4は石見型盾形埴輪の円筒部分である。水を流すための管に転用されたものと思われる。

SD02 (5~11) 8点を図化した。5・6は土師器皿である。口径8.4cmと8.6cm、器高1.8cmと1.6cmを測る。7は土師器皿であるが高台が付き、口径7.4cm、器高2.9cmを測る。8は瓦器皿で、高台が付く。

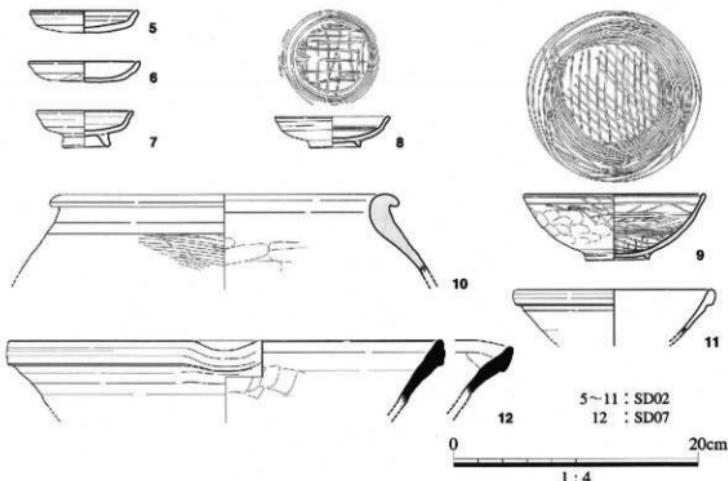


図8 SD02・07 出土土器実測図

口径8.8cm、器高2.5cmで、内面に暗文を施す。9は瓦器碗である。口径14.1cm、器高5.2cmで、内面に暗文を施す。10は瓦質土器甕である。口径25.5cmで、体部外面にタタキ目が認められる。11は白磁碗である。口径15.3cmを測る。

SD07 (12) 東播系須恵器鉢1点を図化した。口径34.0cmで注口部が認められる。

SK04 (16～19) 4点を図化した。いずれも瓦器碗である。口径14.0～14.8cm、器高3.7cmで、内面に暗文を施す。

SK08 (20・21) 2点を図化した。20は瓦質土器擂鉢である。口径29.0cmで、内面に縦方向のキザミ目を施す。21は瓦質土器羽釜である。口径28.8cmで、口縁部外面に段を有する。鉢部下半と体部との境目にケズリによる段を有する。

SK10 (15) 瓦器碗1点を図化した。口径11.1cm、器高2.8cmで、内面に暗文を施す。

SK12 (13・14) 2点を図化した。13は土師器皿である。口径7.7cm、器高1.1cmで、底面の中央付近がやや内側にくぼむ。14は瓦器碗である。口径14.2cm、器高3.7cmで、内面に暗文を施す。

SK15 (22～31) 10点を図化した。22は土師器皿である。口径7.9cm、器高1.3cmを測る。23～25は瓦器碗である。高台の付くもの(23・25)と付かないもの(24)がある。前者は口径11.8～13.0cm、器高3.0～3.5cm、後者は口径11.9cm、器高3.0cmで、いずれも内面に暗文を施す。26～28は瓦質土器羽釜である。口径19.1～23.4cmで、口縁部外面に段を有する。鉢部下半と体部との境目にケズリによる段を有するもの(26・28)と、段がやや不明瞭なもの(27)がある。29は須恵器甕である。口径25.2cmで、体部外面にタタキ目が認められる。30・31は東播系須恵器鉢である。口径26.7～29.8cmを測る。

SK16 (32) 瓦器皿1点を図化した。口径8.2cm、器高1.7cmを測る。

P34 (33) 瓦器碗1点を図化した。口径14.2cm、器高3.7cmで、内面に暗文を施す。

SX02 (34～40) 7点を図化した。34は土師器皿である。口径7.1cm、器高1.7cmで、底面の中央付

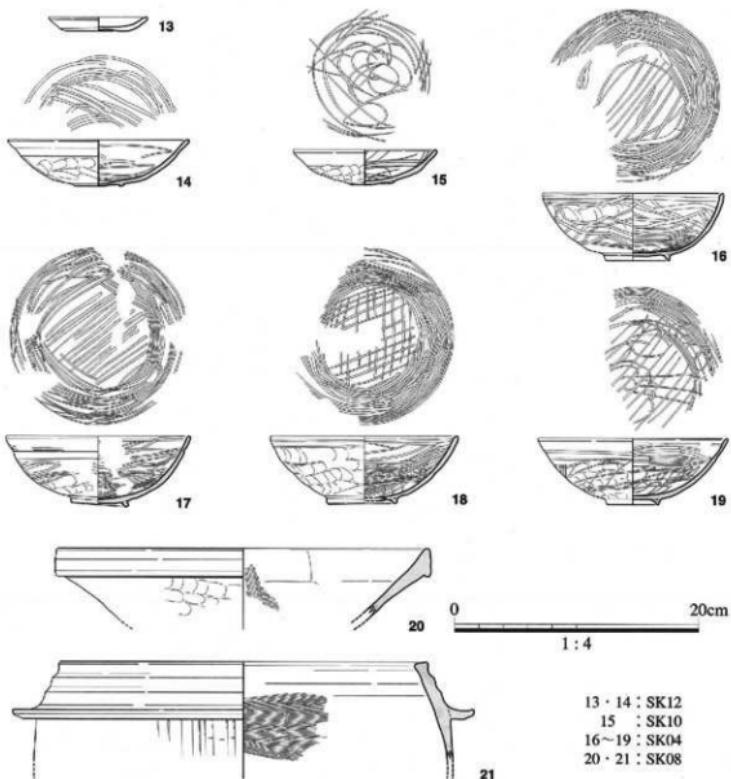


図9 SK04・08・10・12 出土土器実測図

近がやや内側にくぼむ。35は瓦器鉢である。口径9.9cm、器高2.4cmを測る。36は青磁皿である。口径8.5cm、器高1.6cmを測る。37・38は瓦質土器羽釜である。口径18.9～22.2cmで、口縁部外面に段を有する。鶴部下半と体部との境目にケズリによる段を有する。39は瓦質火鉢である。口径40.3cmで、脚部が認められる。外面には菊花文が加飾されている。40は東播系須恵器鉢である。口径21.9cmで注口部が認められる。

SX03 (41・42) 2点を図化した。41は瓦質土器鉢である。口径27.8cmを測る。42は瓦質土器羽釜である。口径23.1cmで、口縁部は内傾し、外面に段を有する。鶴部下半と体部との境目にケズリによる段を有する。

SX05 (43・44) 2点を図化した。43は瓦質土器羽釜である。口径21.4cmで、口縁部外面に段を有する。鶴部下半と体部との境目にケズリによる段を有する。44は瓦質土器甕である。口径28.4cmで、体部外面にタタキ目が認められる。

SX06 (45・46) 2点を図化した。45は瓦質土器羽釜である。口径22.4cmで、口縁部外面に段を有す

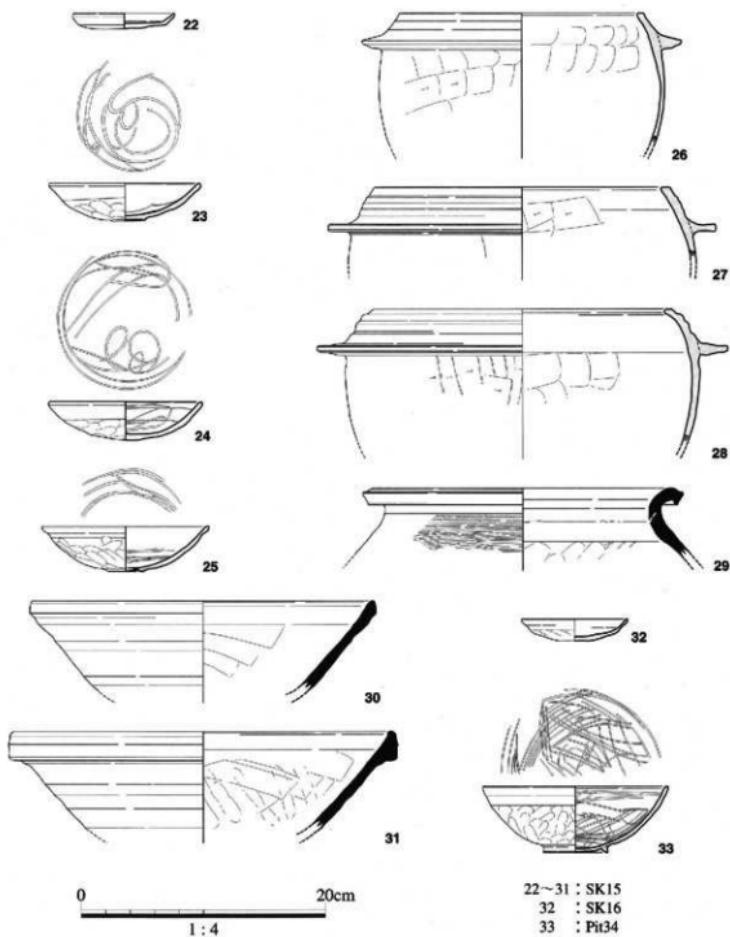


図10 SK15・16、Pit34 出土土器実測図

る。鉢部下半と体部との境目の段はやや不明瞭である。46は瓦質土器甕である。口径31.8cmで、体部外にタタキ目が認められる。なお、他に、軒平瓦、軒丸瓦の破片が出土している（図版九の下段写真）。

SX07 (48) 土師質の容器と思われるもの1点を図化した。底部は円形であるが、口縁部が欠損しており、全形は窺えない。

SX08 (47) 瓦質土器の甕と方形の盤と思われるもの1点を図化した。隅の脚が付く部分のみで、全形は窺えない。

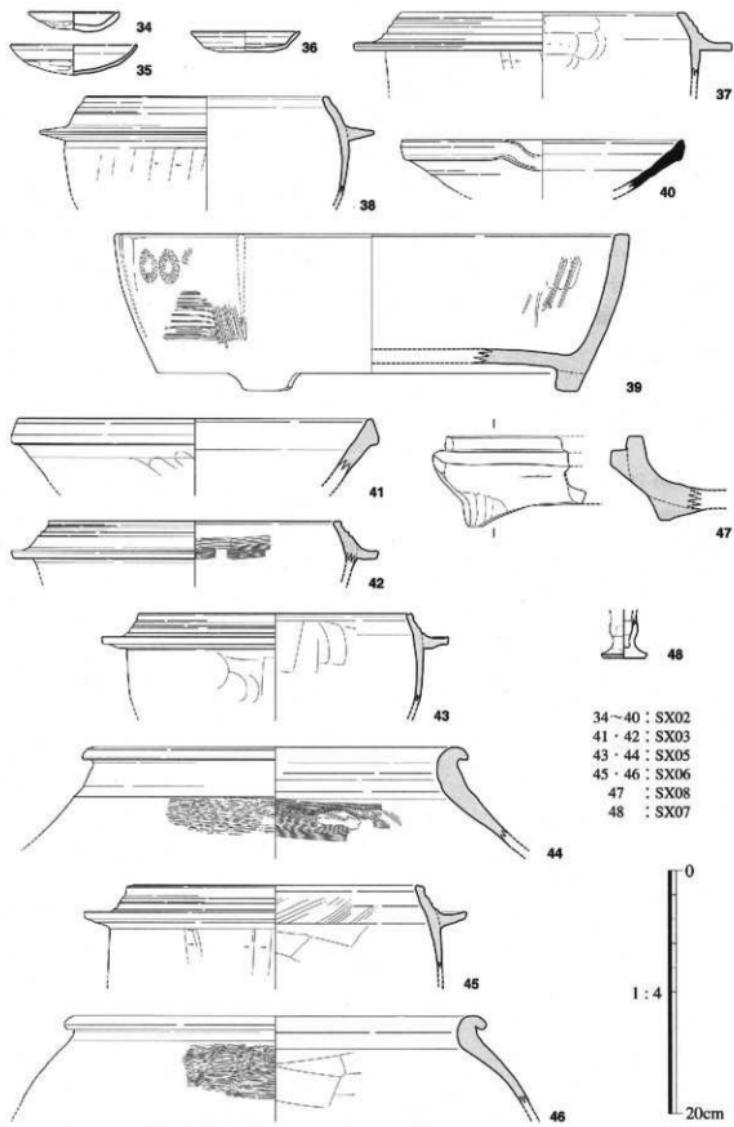


図 11 SX02・03・05～08 出土土器実測図

小結

今回見付かった溝、土壤、掘り込みは、鎌倉時代から室町時代にかけての時期のものが中心である。これらは、水を溜めたり流したりする目的で使用されたと考えられる。今回の調査区でも多数の中世段階のピットを検出しているが、掘立柱建物としては復元できなかった。しかし東側では中世段階の掘立柱建物を検出した調査もあり、周辺で人々が生活を営んでいたことが分かる。このことから、これらの人々が今回の調査区で、日常の炊事など、さまざまな作業を行っていたとも考えられる。

SD01 から出土した盾形埴輪の円筒部分の一部は、流水のための管として再利用したものとも考えられることは先に述べた。このような例は、特に古代において他の調査区でも確認されている。古代、中世の人々の埴輪に対する認識について考察する際の資料となろう。

また、多くの土器類が出土した。これについては、周辺で出土したものも含めてその位置付けを行う必要がある。(新聞)

参考文献

- 上田 駿 1995 「IV 北岡遺跡の調査 93-9区」『石川流域遺跡群発掘調査報告X』藤井寺市教育委員会
新聞義夫 1994 「II 北岡遺跡の調査 92-1区」『石川流域遺跡群発掘調査報告IX』藤井寺市教育委員会
新聞義夫 1995 「VI はざみ山遺跡の調査 93-32区」『石川流域遺跡群発掘調査報告X』藤井寺市教育委員会
新聞義夫 1996 「第1章 北岡遺跡の調査 7 92-5区」『北岡遺跡』藤井寺市教育委員会

図 版



トレンチ南部全景（南西より）



同上（北より）



トレンチ北半部全景（南より）



同上（北東より）





4



5



6



16



7



17



8



18



9

SD01 出土埴輪、SD02、SK04 出土土器



15



24



22



23



48



26



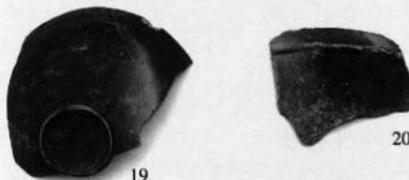
39



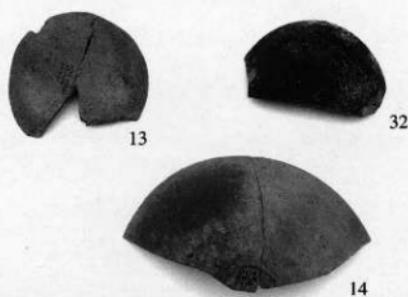
SD01 出土遺物



SD02・07 出土遺物



SK04・08 出土遺物



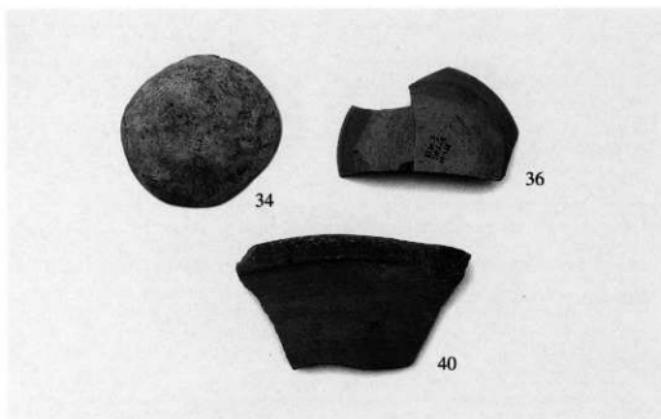
SK12・16 出土遺物



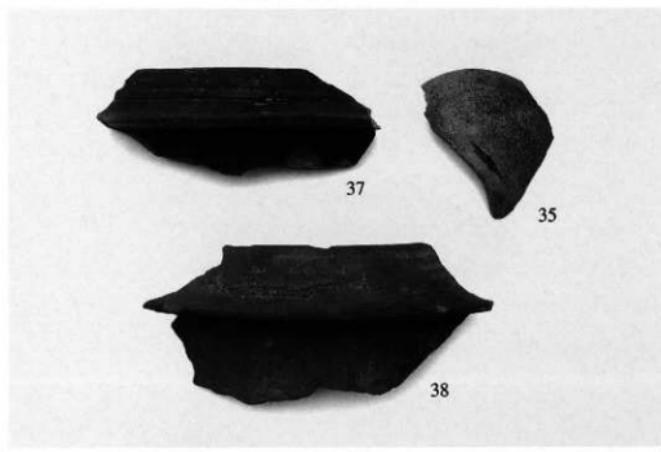
SK15 出土遺物



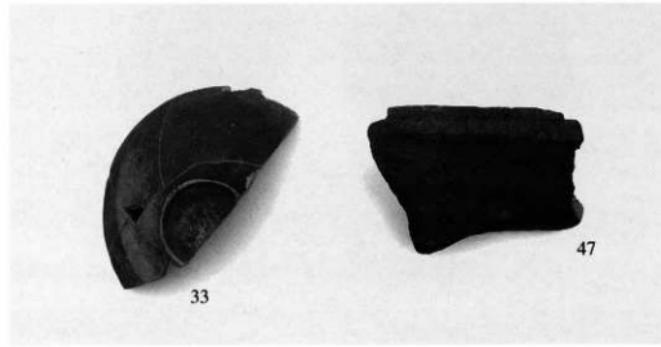
SK15 出土遺物



SX02 出土遺物



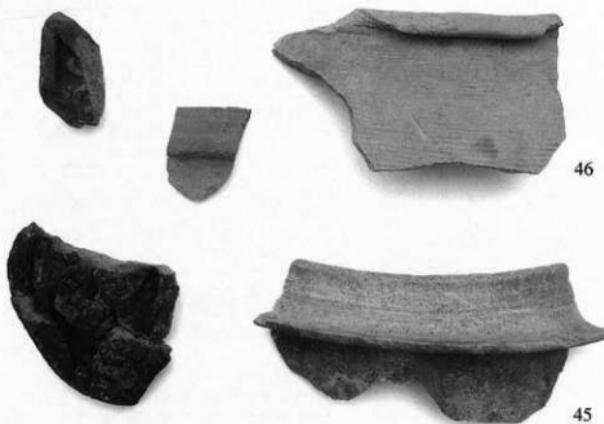
SX02 出土遺物



P34、SX08 出土遺物



SX05 · 03 出土遺物



SX06 出土遺物

例 言

- 1、本書は、建物建設に伴い2009年度に実施した、北岡遺跡（KT2009-8区）発掘調査の概要報告書である。調査地は、藤井寺市恵美坂1丁目241-1他に所在する。
- 2、調査は、申請者の依頼を受け、藤井寺市教育委員会事務局教育部文化財保護課が実施した。期間は、現地調査（外業）2009年9月29日～11月24日、整理作業（内業）2009年12月2日～2010年1月29日である。
- 3、本書の作成は新聞義大が行い、川村和子、木本泰、寺崎理恵、野口尚久、深尾まき子が参加した。
- 4、写真の撮影は、図版四と図版五の掲載分は有限会社阿南写真工房にお願いした。それ以外は新聞が行った。
- 5、図面の方針は、特に断りのない限り座標北を使用した。標高はT.P.を用いた。トレンド位置図は、上を座標北とした。

報告書抄録

ふりがな	きたおかいせき
書名	北岡遺跡
副書名	KT2009-8区
シリーズ名	藤井寺市発掘調査概報
シリーズ番号	第3号
編著者名	新聞義大
編集機関	藤井寺市教育委員会
所在地	〒683-8583 大阪府藤井寺市岡1丁目1番1号 TEL 072 939-1111(代)
発行年月日	西暦2010年3月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査面積 m ²	調査機関	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたおかいせき 北岡遺跡	おおさかし 大阪府 ふじいでらし 藤井寺市 えみさか 恵美坂	27226	53	34° 34' 22"	135° 35' 28"	826	現地調査 (外業) 2009年 9月29日 ～11月24日 (内業) 2009年12月 2日～2010 年1月29日	建物建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北岡遺跡	集落跡	中世	溝、土塹、掘り込み、 ビット		埴輪、土師器、須恵器、 瓦器、瓦質土器、備前焼、 白磁、青磁、瓦			

藤井寺市発掘調査概報 第3号 北岡遺跡 (KT2009-8区)

発行日 2010年3月17日
 編集・発行 藤井寺市教育委員会事務局
 大阪府藤井寺市岡1丁目1番1号
 TEL (072)939-1111(代)
 印刷 株式会社近畿印刷センター
 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号

